

皇居遙拝した回民たち ——日本の回教工作にみる異民族への眼差し

澤 井 充 生

I はじめに

日本軍占領下の内モンゴル¹⁾では1937年から1945年にかけて日本陸軍、外務省、善隣協会などの各機関・団体が「大東亜共栄圏」の建設を目指し、回教工作(回民に対する宣撫・懐柔工作²⁾)を積極的に展開した。内モンゴルの広大な地域にはモンゴル人や漢人だけでなく、回民も数多く居住しており、日本軍は外交上の戦略や地政学上の利害などを考慮し、回民に対しても皇民化政策を実施したわけである。中国大陆における回教工作に関する研究では、新保[1999, 2002]による日本軍の対回民教育事業に関する研究、安藤[2014]による華北地方の回教工作に関する研究、松本[2015]による華北交通の写真にみる回民の表象に関する考察、内モンゴルにおける日本軍の回教工作に関する事例分析[澤井 2014, 2016]などによって日本軍が華北地方や内モンゴルで展開した回教工作の全体像が明らかにされつつある。

その次に取り組むべき作業は当事者の「声」の収集・整理である。ここでいう当事者とは、回教工作に直接的・間接的に関わった日本人、日本軍占領下の中国や大日本帝国で日本人に接触した回民を指す。従来の研究では、資料的制約や方法論上の限界があり、残念なことに、当事者の「声」がなかなか参照されておらず、日本人に遭遇した回民が大日本帝国や日本人をどのように捉えていたのかが明らかにされていない。そのような状況に鑑み、本稿では、善隣協会回想録『善隣協会史』や西北回教聯合会機関誌『回教月刊(西北鐘声)』などの掲載記事を参照し、内モンゴルで回民と言葉を交わした日本人、内モンゴルや大日本帝国で日本人に接触した回民が書き残した文章を事例として取り上げる。日本人側と回民側の記述を仔細に検討することによって、まず、日本人が回民に対して抱いた他者像を炙り出し、次に、日本軍占領下に置かれた回民の境遇や立場に検討を加え、侵略者と被侵略者のあいだに形成された異文化接触の意味を考察する。

II 日本語を学ぶ回民の少女たち

日本軍占領下の内モンゴルでは、蒙古聯合自治政府の首府張家口市に設立された回民女塾が日本人のあいだでその名を知られていた。回民女塾とは蒙古善隣協会³⁾が運

営する回民女子を対象とした寄宿学校である。回民女子の教育に特化した非常に珍しい女塾については善隣協会関係者によって回想録が戦後に発表されており、当時の様子を垣間見ることができる。以下、予備知識として、回民女塾という寄宿学校の成立経緯と特色を確認しておきたい。

昭和15年1月、日本軍占領下内モンゴルの張家口市に回民女塾が開校した⁴⁾。回民女塾の理念は「当時低い地位に置かれていた回教徒の女子教育を振興させる為の「良妻賢母にして且つ、時代に目覚めた女子の育成」と「日本語教師養成」であった。所在地は張家口市内の上堡礼拝寺巷という回民集住地区であり、女塾の近くに清真寺があった。回民女塾の塾長（責任者）は日本人の是永章子が担当し、従妹の是永俊子、今井静子が教員として参加した〔是永 1981：194-195〕。回民女塾の教育方針について当時の関係者が以下の3ヶ条を列挙している。以下、引用しておこう。

表1 回民女塾の教育方針

1	日語教育は日常会話を主とし、先ず仮名文字を習得させて後、漢字教育に進む。
2	礼儀作法を厳にし、躰教育に努めると共に、手工、図画、唱歌音楽による情操教育を行う。
3	所謂アテネフランセ方式の語学教育法により、教室内に於て一切現地語の使用を排し、徹底的に日本語による日本語の教育を行う。

出典：野副〔1981：124〕から抜粋した。

この教育方針には善隣協会における回民女塾の位置づけがよく表れている。すなわち、回民女塾では回民の女生徒たちに日本語を徹底的に教授することはもちろんのこと、単に日本語の習得だけでなく、日本式の礼儀作法も躰として体得させようとしていたことがよくわかる。また、フランス式の語学教育の方式、つまり西欧近代の教授法を善隣協会がモデルとして捉えていたことも興味深い。

表2は蒙古善隣協会組織図であり、回民女塾が各支部、牧場、診療所とおなじように同協会を構成する部署のひとつとして位置付けられていたことを確認することができる。

表2 蒙古善隣協会組織図（1939年）

蒙古善隣協会	
理 事 長：	前川坦吉
理 事：	野副金次郎、織田純
総務部長：	音尾秀夫
調査部長：	後藤富男

包頭支部：織田純 錫盟支部：林重弘 烏盟支部：横山輝 多倫牧場：金子鋏 興亜義塾：藤縄克雄、中田善水 回民女塾：是永章子 回民診療所：長野誠一郎
職員93名

出典：『善隣協会史』（1981）の図表をもとに作成した。

善隣協会理事を務めた野副金次郎が「善隣協会の対回教文化事業」という一文で回民女塾の設立経緯について詳しく述べている。野副の文章はいささか長いが、重要な証言が散見されるため引用し、回民女塾をとりまく情勢を確認しておきたい。

是永先生の努力が実り軍参謀部の認むる処となったが、ここに心配な事態が予想される事になった。それは来年四月小学校（回民初級小学校：筆者注）の学級増加の場合とても是永先生一人で三校（六級）の日語教育を担当する事は物理的に不可能で、それが後数ヶ月に迫って居る。誰か良い先生を選任すればよいが、良い後はえてして悪い事にもなる。どうす可きか？

井上理事長とも相談したが、結局は日本語教師を選任採用と云う結論になってしまう。

が然し其の他の方法として考えられるのは、回民の女子青年を集めて日本語教育の先生、是永先生の分身を育てる事である。

先ず是永先生に相談した。是永先生は快諾されたので井上理事長に再度相談したが、大反対である。『第一、是永先生の身体がもたないよ。今でも過労である。実施不可能な案だ』尤もである。

前川理事長に相談すると、『案は面白い。然し実施仲困難である。再考してはどうか』と。

回民初級学校の学級増加は六ヶ月後に迫って居る。

昼間、三初級学校の日語教育を担当し、夜間は女子塾生（五名位）の訓育に当る。云うは易しいが女的身で堪えられるか？ 是永先生に再度相談して決意を求める事にした。

是永先生の決意は堅かった。『困難はわかっています。然しやってみましょう。六ヶ月の辛抱です。身体にも充分注意してやりましょう』と是永先生の決断で「善隣回民女塾」開設方針が決った。前川理事との相談で、回教徒の家屋を借用決定。この実施は音琴教官の斡旋努力で解決した。

軍の諒解を得て、包頭、厚和、大同、張家口、啄鹿（涿鹿：筆者注）の各回教支部に

夫々手配して、日本語教師養成のため女子青年各1名宛の推薦をさせた。

之も音琴教官の理解ある努力で成功し、愈々回民女塾が発足することになった次第である。

(中略)

女塾生の教育は夜間にやる次第で、昼間は自習する訳であるが、塾の附近に未入学の回民の子弟が多数居ることに着目して、善隣回民女塾に附属小学校⁵⁾(一〇名)を併設する事にした。

附属学校の生徒は一切学費不用とする外、学用品一切および制服の上っ張りも支給した〔野副 1981: 124〕。

野副の記録によれば、回民女塾の主な目的が回民女性を日本語教師として養成することであり、回民女塾には師範部が開設され、その附属として小学校が設立された経緯がよくわかる⁶⁾。

ここで回民女塾の授業科目や寄宿生活に目を向けてみたい。日本人教員だった是永俊子の回顧によれば、授業科目として日本語、中国語、数学、地理、歴史⁷⁾、習字、裁縫、料理、作法、体育、音楽などが開講され〔是永 1981: 194-195〕、当初、是永が単独ですべての授業を担当していた〔丁瑞蘭 1941: 6〕。毎日午前6時起床、就寝は午後10時、授業は午前8時から午後4時まで、毎朝1時間は「千字文」の習字が課せられていた。午後には実習、夜には2時間の自習が割り当てられていた〔丁瑞蘭 1941: 6〕。回民女塾の元塾生が言うように、早朝から夜まで回民女塾の生徒たちは日本人教員に接していたことがうかがえる。

回民女塾の在学年数、在学者数などをみておこう。回民女塾の修業年限は3年で、定員数は各学年10名と定められていた〔是永 1981: 194-195〕。13歳から17歳までのある程度教養のある回民女性が選抜されたという〔丁瑞蘭 1941: 6〕。善隣協会の記録によれば、第一期生が4名⁸⁾、第二期生が6名、第三期生が5名、第四期生が9名在籍していた〔善隣会(編) 1981: iii〕。当時、中国では回民女性の就学は非常に珍しく、学生募集に苦労したようである。

回民女塾は寄宿制を大きな特徴とし、日本人教員は女生徒たちと起居をともにし、白麵、粟、高粱、きびなどの料理を作り、一緒に食べ、ときどきお米のご飯(ライスカレー、おすし)を実習を兼ねて作った〔是永 1981: 194-195〕。第一期生の丁瑞蘭は回民女塾について次のように語っている。

鄙人事変発生未入学校読書、後有善隣回民女塾之成立、塾長即是永先生担任、不但上課在一塊、而食事亦在一起、因鄙人從幼至今未曾入過回民女子学校、並由於好奇心之故、以至對於日語頗感興趣、遂入善隣回民女塾肄業〔丁瑞蘭 1941: 5〕。

写真1 善隣協会関係者と回民女塾の教員・生徒たち



第1期回民女塾卒業生に囲まれて（昭和16年1月）

（前列中央）是永塾長、（第2列中央）井上理事長、（第3列左より3人目）音尾秀夫
（最後列左より2人目）藤中弁輔、（1人おいて）前川坦吉、林宗生、野副金次郎

出典：『善隣協会史』

次に、回民女塾卒業生の内訳を整理しておこう。日本人教員だった是永俊子が当時の塾生の名前を列挙しているが〔是永 1981：195〕、記憶が曖昧なのか不明瞭な点が多い。

寝食起居を共にし、心と心の触れ合いによる教育法は、夢多い少女達の胸にもびんびんと響き、その教育の実をあげた。塾生を我子の如く愛し、心魂を傾けた塾教育は認められ、日本より訪れる人は一度は回民女塾に足を運んで、塾長の熱弁にきき入り、可愛い伊斯蘭（イスラム）乙女達の勉強振りに感心と激励の言葉とを残し、張家口の名物学校となった。

（中略）

今でも臉を閉じると、塾生達の一人々々の顔が浮かんでくるが、三〇余年を経た今日、姓は覚えているが名を忘れていて思い出せない。黄帝の都した涿鹿からの閃凌雲さん（一回生）張家口市内の鄭瑞蘭さん（丁瑞蘭：筆者注）、李さん、敦さん、大同からの閃さん達の一回生は、回教校の日本語教師として就職していた。二回生は、大同からの王淑貞、白さん、厚和からの張さん張家口市内からの馬さん二人、趙、安、

楊、丁さん達であった。回教徒の中では良家の進歩的家庭の小姑娘が多かった〔是永 1981：226-227〕。

是永の回想だけでは情報が不足しているため、日本軍占領下内モンゴルの回民の調査成果をまとめた『邦内回教調査概要』（1942）で可能なかぎり補足し、表3にまとめている。この概要には蒙疆政権下の回民小学校の教員一覧が記載されており、教員一覧のなかに回民女塾卒業生の名前が記載されている。例えば、張家口市の回民高級小学校には閃凌雲（21）、回民初級第一小学校には李芳英（22）、回民初級第二小学校には佟鳳麟（19）、回民初級第三小学校には艾玉如（24）、大同の回民初級学校には閃月忻（19）、厚和の回部小学校には丁瑞蘭（22）の氏名が明記されており、卒業生のうち6名が日本軍占領下の小学校に日本語教員として雇用されていたことが確認できる。

表3 回民女塾卒業生

卒業年度	氏名（出身地）
第一期生	閃凌雲（涿鹿）、丁瑞蘭（張家口）、閃月忻（大同）、李芳英、敦
第二期生	馬（張家口）、馬（張家口）、趙（張家口）、安（張家口）、楊（張家口）、丁（張家口）、王淑貞（大同）、白（大同）、張（厚和）
不明	佟鳳麟、艾玉如

出典：『善隣協会史』（1981）・『邦内回教調査概要』（1942）をもとに整理。

意外なことに、回民女塾に関しては、当時、日本人の訪問者が多かったのだろうか、目撃談を容易に目にすることができる⁹⁾。例えば、張家口駐在公使を務めた陸軍の岩崎民男の回想によれば、回民女塾の女生徒たちの「日本語の巧さ、記憶力の優秀さ、理想の高遠さに、全く驚いた」〔岩崎 1981：153〕らしく、また、日本人教員の指導力に脱帽し、賞賛の声を贈っている。

張家口に、蒙古善隣協会経営の回民女塾があり、大分県出身の是永章子女史と一人の女助手が、一五の回民女生徒と、起居を共にして指導していた。

回民の女子が、異境に出ることは全く珍しいが、包頭方面の上流子女を、よくも張家口に集めたものだ、と思った。

私が初めて巡視した時、一女生徒が、彼女らの大理想を滔々と日本語で発表し、ついで「女塾の十訓」を、全員が日本語で述べた。

私は、彼女らの日本語の巧さ、記憶力の優秀さ、理想の高遠さに、全く驚いた。同年輩の日本の女生徒に、勝るとも劣らない、と感心した。

また、彼女らの茶の湯を見、是永女史の指導力の卓抜さに、敬意を表した。

私は、女塾に金一封を贈った。これで揃いの和服を作り、私の官邸を訪問し、踊り

を披露した。

現在、彼女らはいかに暮らしているであろうか。日本の文化をいかに消化した伝えているであろうか。まことに懐旧の念にたえぬものがある〔岩崎 1981: 153〕。

文部省の視学官も日本語教育の実態調査を内モンゴルで実施したときに回民女塾を訪問している。視学官は回民女性が小学校で日本語を教授していた光景に驚きを隠さないでいる。

自分は満洲、北支、蒙疆に於ける日本語教育の実態調査を行った訳ですが、張家口の回民初級学校の日本語の先生は、現地人でありながら一切日本語で日本語教育していましたね。これは外の何処にも無い事です、あの先生は善隣回民女塾出身の由ですが、何年教育されたのですか〔野副 1981: 124〕。

この視学官が張家口市の回民初級学校で目撃した回民の教員は丁瑞蘭という女性である。丁瑞蘭（張家口出身）は回民女塾の第一期生で、成績優秀者だったらしく、善隣協会の回顧録にしばしば登場する。また、彼女自身が綴った文章が西北回教聯合会の機関誌にしばしば掲載されたことから、当時、内モンゴルで「進歩的」な若い女性として目立っていたのであろう（詳細については後述する）。

内モンゴルを旅した作家の貴司山治も回民女塾を訪問し、回民の女生徒たちの日本語劇を観る機会に恵まれ、そのときの様子を詳しく描写している。また、貴司は回民女塾で知り合った回民の女生徒たちが来日した際、わざわざ自宅へ招待しており、女生徒たちとの会話は非常に興味深い。以下、引用しておこう。

女塾の所在は、礼拝寺巷という山手の町だが、その一角に五〇〇坪の地を占め、四周を高い土塀で囲い、その中に教室、寄宿舎、炊事場など一切が具備していて、二〇人くらいの漢回（漢回）の娘さんが、国中から集まってきてここに寄宿して、勉強している。

私は山本君と二人で、ここの応接室で、塾長の是永章子という四八歳の先生に会う。

生徒の実態を見せてくれることになり、ちょど晩飯の支度最中らしかったが、是永先生の号令で、エプロンをつけたままの生徒たち一五人を、校庭にあつめ“撃滅体操”だの、“米英を打ち倒せ”と叫ぶ掛け声だの、恐ろしく露骨な排米唱歌だのをやらせて、最後に彼女たちの劇を見せてくれた。それは「二つの姿」という対話劇で、張家口に住む妹が、重慶にいる姉を偲んで泣く——という筋だが、妹を演じる馬淑貞という一五歳の痩せた少女は、途中でほんとうに泣き出して、顔から手を離さない。是永先生が肩を叩いたり、頭を撫でたりして慰めると、馬さんは、今度は手離

しで泣き出し、一〇人以上の他の少女たちも、馬さんを囲んでみな泣き出した。ワーワーと泣き声を一団となつてはりあげるの、驚いた私が、「馬嬢の姉が、ほんとうに重慶にいますか」ときくと、是永先生は首を振って、「そうではありません。芝居をしているうちに、みんなが劇中の人となつて、いつもああしてオイオイと泣くのです」。

私は北京でも、少女歌劇学校で、演技中の少女が、ほんとうに泣き出したのを見たが、それは漢人女性の特徴と思ひのほか、漢回の娘さんも同様なを知つて、目を丸くした。

是永先生はこういった。「キシ先生、これを芝居と思わず、娘たちの心の中にある分裂した二つのものを、察してやって下さい」。

日本名を「豊田蘭子」という青白い顔の娘が、私の前に出てきて、巧みな日本語で「この対話劇は、何度やっても、いつもこうなんです。ことしの夏、戦線慰問に行き、方々でこの劇をやりましたが、その時は中国語です。そして、いつもマイクで敵前放送しました。すると、放送中は、すぐ一町むこうの八路軍の陣地は静まり返り、一発も弾丸を射ってきませんでした」。「あんたは、日本語が実にうまいが、何年くらい稽古しましたか」と私は聞いた。「私、四ヶ月です」。横からは永先生が説明する。「回民の子は、とても早いんです。蘭子ちゃんは、本名は丁瑞蘭で、実はもう二年前の卒業生、ここへ日本語の教師に来てもらっています。来年の春には、日本の大学へ留学します」。それにしても、四ヶ月で日本語ペラペラとは驚く。

この時の馬淑貞、丁瑞蘭の二人は、翌年東京に来て、私の家にも遊びに来、私は二人から“回民の生活”について、数時間の談話をとつたが、この時、私が「あんた方は、回教民族として“大東亜戦争”の矛盾を感じませんか」と聞くと、丁さんの答は、「私たちは民族としてイスラム（回教）ですが、国民としては中国人です。早く戦いが終り、日本が中国から引揚げられて、私たちの生活に平和が返ってくることを、待ち望んでいます。でも、このことは誰にも言えません」。

私は、その時の丁さんの賢しげな微笑の顔を忘れることが出来ない〔貴司 1981：226-227〕。

貴司がはっきりと覚えている豊田蘭子こと丁瑞蘭との会話は回民女塾の女生徒がおかれた複雑な状況を探るにあたって非常に有益な情報を提供してくれる。貴司の回想によれば、丁瑞蘭の本音を中国ではなく、日本ではじめて聴けたわけであるが、丁瑞蘭が日本に対して抱いた感情には侵略者に対する敵愾心もあったであろうが、「先進国日本」に対する憧憬も随所に垣間見られる。例えば、丁瑞蘭は回民女性の教育について語った際、日本人女性をモデルケースとしてしばしば言及していた〔丁瑞蘭 1942：31〕。

可知日本婦女之特長、因描素很少、但從各方面看来、大概稍能了解些日本婦女之精神、並可以想到我們中国婦女所有的弱点、必須如何打破舊有的惡習、將如何改革、並且要認識現勢、及期收日本婦女之美德〔丁瑞蘭 1942: 31〕。

一方、当時、日本人が内モンゴルで回民女性に出会い、そのときに抱いた「少数民族」のイメージはある種の固定観念に縛られており、人類学的な関心を呼び起こさずにはいられない。例えば、回民女塾元教員の是永俊子は回民の塾生の外見上の特徴を次のように表現している。この逸話は文化人類学者の意田英一郎が回民女塾を訪問したときの話である。

回教徒の女性は総体的に美人が多かったが、故石田英一郎人類学博士が、まだ善隣協会に奉職しない或年の夏に、女塾を訪れ、顔の寸法をはかった後で、「女塾には大同の石仏の代表的な顔の方がいますね」とおっしゃった。それが、大同からの王さんと市内の馬さんとであった〔是永 1981: 195〕。

是永俊子は回民女性には「総体的に美人が多かった」と述べているが（「美人」の定義がそもそもよくわからないが）、是永が回民女性をエキゾチックな「少数民族」として眺めていたことがうかがえる。もちろん中国人（主に漢人）や外国人が回民の容貌を漢人のそれとは異なると指摘することは決して珍しいことではないが、回民をエキゾチックな「少数民族」として過剰に描写することには注意せねばならない。また、文化人類学者の石田英一郎が回民女性の容貌を山西省大同の石仏に例えているが、大同出身の回民女性が回民女塾にいたことは事実であるが、彼女たちの外見上の特徴を石仏と関連付けることはいささか短絡的ではないだろうか。ある地域の人びとの顔立ちや風貌をその地域の遺跡の特徴と結びつけることは珍しい比喩ではないが、仏像の顔立ちを山西省回民の代表的な容貌として十把一絡げにするのは危険であろう。

意外なことに、日本人による回民の描写にはエキゾチシズムが常に付きまとうらしい。張家口の西北研究所に勤務した今西錦司（生態学者）は現地で見かけた回民女性を次のように描写し、個人的な感情を吐露している。

日本側で経営しているある女学校の卒業生に、一人色白のきれいな娘がいた。日本語が巧みで、どこかの日語の先生をしているという。日本語をつかって現地民のあいだにはいつてゆけるなら、わたくしとしてこれほどありがたいことはない。彼女が回民の娘であるということなどは、わたくしにとってはなにも問題ではなかった。（中略）わたくしはさらに許されるならば、彼女といっしょに生活してみたいとも考えた。混血を、わたくしは欲していたのである。血の交流をもっと頻繁に行なうことによって、世界の民族は一つにならなければならないというのが、わたくし

の平素からの主張であったから、わたくしにすれば、適当な相手さえ見つければ、この主張の実践に忠実でありたいと願うのは自然である〔今西 1995 (1948) : 206-207〕。

戦後日本の生態学および人類学を牽引した今西錦司が内モンゴルでたまたま出会った回民女性に対して生々しい欲望を抱き、そのことを文字に残していたことには筆者にとっては非常に衝撃的であった。当然のことながら研究者が調査地において性的な欲求をもつことそれ自体を否定するつもりはないが、今西錦司が回民女性に投げかけた眼差しには性的関心が込められており、その表現は実に直截的である。

Ⅲ 来日した回教徒視察団

善隣協会による回民女塾の運営のほか、日本軍特務機関が蒙疆回教徒訪日視察団を組織したことは先行研究¹⁰⁾で指摘されており、近年、全貌が明らかになりつつある。駐蒙軍が内モンゴル各地を支配すると、日本軍特務機関をつうじて回民に対する宣撫・懐柔工作を展開した。その一例として、日本軍特務機関は蒙疆回教徒訪日視察団を企画・組織し、回民の有力者を日本へ何度も派遣した¹¹⁾。少なくとも5回派遣したことが記録されている¹²⁾。本稿で取り上げるのは第5回訪日視察団の記録である¹³⁾。日本軍特務機関は内モンゴルで西北回教聯合会という傀儡団体を現地の回民に組織させたのであるが、機関誌『回教月刊（西北鐘声）』に訪日視察団の感想文が掲載されている。そのなかには日本語で書かれたものもあり、非常に資料的価値が高い。ここでは主要なものを引用し、日本を訪問した回民たちの感想・体験を追体験してみよう。

1 第5回訪日視察団の概要

第5回訪日視察団は1943年10月に実施された。参加者一覧は表4のとおりである。第1回・第2回と同様、日本人が案内者を務め、蒙疆政権下の回民が団長・副団長・団員を構成した。案内者の1人、小村不二男は戦後日本イスラーム界の重鎮であるが、当時、西北回教聯合会では重要な役職に就いていた。第5回訪日視察団には案内者2名、通訳1名、団長1名、副団長1名、団員8名が参加した。かれらの出身地は日本軍占領下の厚和市、張家口市、大同市、薩拉齊県、涿鹿、熱河であった。団員の職業に目を向けると、西北回教聯合会、回民小学校、回民青年学校などの職員が非常に多く、11名の団員（全員が回民）のうち、6名が教員であった。このような知識人の派遣は第1回・第2回訪日視察団にもあてはまる。おそらくかれらは西北回教聯合会が運営した回民小学校や回民青年学校に勤務していたため、日本軍特務機関によって将来性のある協力者として選抜された可能性が高い。

表4 第5回訪日視察団(1943年10月)

団内役職	氏名	出身地	職業
案内者	永岡泉		軍嘱託
案内者	小村不二男	京都	西北回教聯合会本部指導官
通訳	馬雲秀		回教委員会属官
団長	麻土珍	厚和	西北回教聯合会本部総務部長兼厚和副支部長
副団長	馬忠	大同	晋北附属小学校校長
団員	恵子明	張家口	西北回教聯合会張家口支部評議員
団員	魏林	薩県	西北回教聯合会包頭支部薩県分会長
団員	馬紹箕	大同	西北回教聯合会大同支部総務股長
団員	白體乾	大同	大同回民初級小学校長
団員	閃日大	涿鹿	張家口回民青年学校教員
団員	王應選	張家口	張家口回民高級小学教員
団員	麻成	厚和	厚和市立回部小学教員
団員	孔廣華	熱河	包頭青年回民学校教員

出典：『回教月刊（西北鐘声）』（第2巻第5期：28-29）

ここで、第5回訪日視察団の旅程を確認しておく。訪日視察団の参加者は蒙疆政権の首府張家口にまず集合し、列車で北京へ向かった。北京から山海関、満洲国を經由し、朝鮮半島の釜山まで移動し、釜山から船に乗って日本へ向けて出発した。下関到着後、翌日には東京へ移動している。日本では、下関、東京、京都、大阪、神戸、門司、福岡、八幡などを訪問し、東京での滞在日数が最も長かった（9日間）。表5は全日程を整理したものである。

表5 第5回訪日視察団の日程

年月日	活動内容
1943年9月28日	張家口発（列車）
1943年9月29日	移動（北京、山海関、満洲国を經由）
1943年9月30日	釜山発、下関着（吉野館に宿泊）
1943年9月31日	下関発
1943年10月1日	東京着 ※滞在9日間 東京イスラム教団と懇談。 皇居、靖国神社、明治神宮 陸海軍省情報局関係者遺族を慰問 豊島師範附属小学校、帝国大学を訪問 中央電話局放送局

年月日	活動内容
	国会議事堂 東京回教礼拝堂 海軍館 日比谷宝塚劇場 日光華嚴の滝 東照神宮・荒山神社 鶴見自動車工場、川崎製鋼所
1943年10月10日	山田着 伊勢神宮
1943年10月11日	木津発、京都着 ※滞在2日間 桃山御陵、乃木神社 大丸百貨店 嵐山、比叡山
1943年10月13日	京都発、大阪着 ※滞在3日間 大阪役所、蒙古駐阪弁事処 電気科学館 宝塚の温泉、宝塚歌劇団 大阪精華国民学校 参天堂回教家庭薬工場 大阪毎日新聞社
1943年10月17日	大阪発、神戸着 ※滞在1日間 神戸高等商船学校 神戸モスク（イスラーム小学校）
1943年10月19日	神戸発、下関、門司、福岡着 八幡宮 博多公園、元寇記念館 宮崎宮
1943年10月21日	福岡発、八幡着、下関発 八幡製鉄所
1943年10月22日	釜山着
1943年10月23日	京城発
1943年10月24日	奉天着 回教協会代表と会談 清真南寺、回教協会支部を訪問
1943年10月25日	奉天発、撫順着 撫順炭鉱を見学 鉄西満毛工場、北大部洪啓部隊を訪問
1943年10月26日	奉天発、新京着 関東軍司令部忠霊塔 回教協会本部、イスラーム学校を訪問

年月日	活動内容
1943年10月27日	新京発、吉林着
1943年10月28日	新京発
1943年10月29日	北京着
1943年10月30日	北京発、張家口着
1943年12月1日	蒙古政府会議室座談会

出典：『回教月刊（西北鐘声）』（第2巻第5期：29、第3巻第1期：18-19）

蒙疆回教徒訪日視察団の訪問先には際立った特徴が見られる。筆者は第1回・第2回視察団の事例分析でも指摘したが〔澤井 2014〕、まず、訪日視察団の参加者は日本国内のイスラーム関連施設を必ず訪問することになっていた。例えば、内モンゴル出身の回民たちは東京を中心としてモスクやイスラーム学校などでムスリムとの交流に参加していた。最も有名なものが東京回教礼拝堂の見学である¹⁴⁾。このほか、訪日視察団の参加者は神社仏閣（特に靖国神社）、皇居、軍、学校、工場、百貨店、劇場などの施設にも必ず案内されていたことも無視できない。おそらく企画者の日本側によって大日本帝国の「先進的」な側面が訪日視察団に意図的に紹介されたからであろう。外国からやってきたムスリムに対して皇居遙拝を行わせていたことには筆者は写真を初めて見つけた際は非常に驚いた（写真2）。

写真2 皇居遙拝する外国人ムスリムたち（回民も含む）



來朝回教教徒皇居遙拜

出典：『記録回教圏展覽会』（1940）

2 第5回訪日視察団員の感想

それでは、第5回訪日視察団員の感想文を引用し、個別事例を確認してみたい。『回教月刊（西北鐘声）』には11本の感想文（執筆者は10名）が掲載されている。そのうち8名が漢語、3名が日本語で原稿を執筆している。紙幅の関係上、投稿原稿のすべてをここで引用することはできないため、主要なものだけを引用しておこう。

表6 第5回訪日視察団員の感想文

氏名	題目
麻士珍	蒙疆回教徒訪日視察団日誌
閃日大	友邦日本交通実況
王應選	友邦人情精神之我見
孔廣華	聖戦下日本之雄姿
恵子明	対日本産業之所感
麻成	日本文化教育
魏林	日本之林農
孔廣華	訪日帰来後之感想
白體乾	訪日視察感想
馬紹箕	訪日視察感想
馬忠	訪日視察感想

出典：『回教月刊（西北鐘声）』（第3巻第1期：16-31）

王應選（張家口出身）は「友邦人情精神之我見」という文章を『回教月刊（西北鐘声）』に投稿し、訪日視察の感想を発表している。王應選の感想文には、(1) 忠君敬神、(2) 崇禮尚義、(3) 熱情卹弱、(4) 奉公守法、(5) 誠信不妄というキーワードが散りばめられ、特に大日本帝国臣民の「愛国精神」に対する敬意が示されている。例えば、王應選は皇居遙拝について次のように綴っている。

日本之臣民、無分老幼、凡經皇城均向遙拝、対天皇陛下之崇仰、衷心尊敬、同時日本国民一生至少得遙拝一次、否則終身遺憾、此種愛国忠君之精神、実為吾人可仿倣者也〔王應選 1943：20〕。

他の団員にもあてはまるが、王應選は回民であるから、異宗教の神靈的存在を崇拝することはないが、大日本帝国臣民による天皇崇拝に対して理解を示し、そのような国民性を模範とすべきだと述べている。

大日本帝国の侵略戦争を「聖戦」と回民がみなしたことは非常に興味深い。これは王應選にかぎらず、他の団員にもあてはまる。例えば、孔廣華（包頭出身）は「聖戦下

日本之雄姿」という感想文を投稿し、日本訪問後、戦時下日本の「自給自足の体勢」に触発され、「友邦一億国民之精神」を褒めたたえている。孔廣華は次のように言う。

皇軍之英勇所至、但此外尚有友邦一億国民之眞精神存在、始獲得勝利重要原因之一、日本国民無論從事於何種事業、皆能自戒自肅、以報国為懷各個国民均充分顯示出(中略)今後希望邦内教胞及西北教胞要相信友邦日本物資雄厚經濟力之充實、日本国民精神之昂揚更要抱定大東亜聖戰必勝的信念終歸日本、最後還希望仿效友邦大和民族之精神同甘共苦盡鎗後之熱誠、分担興蒙興亜之重責、邁向大東亜聖戰之完遂途、以期共榮圈各民族之解放〔孔廣華 1943a: 22〕。

包頭市の回民青年学校に勤務する孔廣華は日本訪問後、大東亜戦争という「聖戦」の遂行が大東亜共栄圏の確立をもたらし、友邦国日本を信頼し、日本とともに回教を復興させるという意気込みを述べている。

大東亜戦争已步入第二年的今日、我回教民族更應有一種新的醒悟、因為大東亜戦争是為解放東亜各民族而戦争、試觀被壓迫の諸民族、我回教教胞佔其多数、盟邦日本也可說是回教的救星、欲求聖戰完遂共榮圈確立、我回教民族亦有相当責任〔孔廣華 1943b: 27〕。

孔廣華は大東亜共栄圏盟主の日本の特徴として、(1) 敬祖崇神遵皇之信仰、(2) 日本文化之優點、(3) 教育人材、(4) 科学之發達、(5) 一貫之精神を列举し、「以皇化教育改為回教化、為眞宰為回教奮闘而犧牲享受“舍西得”之樂發揚回教固有之文化」、すなわち皇民化政策(教育)をイスラームに合わせるかたちで改変し、アッラーおよびイスラームのために奮闘し、犠牲を惜しまないことがシャヒードであり、回教固有の文化を発揚させるべきであると結論付けている〔孔廣華 1943b: 28〕。

ここまでは漢語で感想文を書いた団員たちを紹介したが、日本語で原稿を執筆した団員がいたことにも注目しておこう。該当者は白體乾、馬紹箕、馬忠の3名であり、自分たちの感想を流暢な日本語で綴っている。かれらの感想文を順々に紹介してみよう。

最初の白體乾は山東省大同出身で、日本軍占領下の回民初級小学校の校長を務めていた。かれは教育者としての責任感が強いからか、明治維新以後の日本の発展過程を説明し、国家政策を肯定的に評価すると同時に日本の領導のもと大東亜共栄圏の確立に回民も邁進すべきだと力説する。

私ハ今次政府ノ命令ヲ蒙リ第五次訪日視察ノ重任ヲ担当セシメラレ自己ノ才能、薄弱ヲ感ジ経験亦浅ク誠ニ恐縮シアリタリ惟フニ日夜競々トシテ深く研究ヲ加ヘ政府ノ委託セラレタル誠意ニ応ルベク且又此視察ノ所得ヲ我カ回民ノ啓蒙ニ資スルヘ

ク努メタリ〔白體乾 1943: 28〕。

友邦大日本ガソノ一億一心ノ人民ト雄厚ナル經濟ヲ以テ東亜ノ領導ニ当ラバ樂土ノ建設又容易ニシテ吾カ東亜人ハ友邦ノ後ヲ追ヒ同生共死ヲ誓ヒ東亜新秩序ノ共建東亜共榮圈ノ確立ニ突進スヘキナリ、吾等ハ徹底的ニ友邦日本ヲ信賴シ友邦ノ領導ニ応ヘルヘク吾カ疆内教胞ハ各自一段ノ努力ヲ緊要トスヘキヲ痛感スルモノナリ〔白體乾 1943: 29〕。

次の馬紹箕も山西省大同出身で、彼は西北回教聯合会の大同支部総務股長を担当していた。馬紹箕も日本語を流暢に使いこなし、「大東亜盟主」の「進歩」・「発展」を高く評価し、大東亜戦争を「聖戦」と捉え、新しい世界秩序の形成に期待を寄せる。

盟主大日本ハ皇統連綿、八紘一字ノ大理想ヲ基調トシ萬民大和団結、道義ノ実践ニ邁進ニ邁進シ今ヤ大東亜共榮ノ新圈確立ニ向ツテ着々ソノ成果ヲ挙ケツツアリ

盟主大日本ハ明治維新ヨリ昭和ノ隆盛ニ至ル迄ソノ間約七十年ノ精勤ハ政道ノ刷新ニ富国強民ノ上ニ画期的成績ヲ挙げ遂ニ世界ノ首坐ヲ占ムリニ至リアリ

国力ノ充実、国民精神ノ昂揚、公私經濟ノ円滑、各種物資ノ充実、文化教育ノ向上、農事生産ノ進展、水陸交通ノ八達、商工市場ノ躍進、諸般政治施設ノ進歩等スベテ世界最高水準ヲ行クモノトシテ感嘆ノ外ナシ〔馬紹箕 1943: 29〕

イヅレニシテモコノ聖戦ニ必勝ヲ期スルタメニハーニ国家精神ノ振作ニニ国民精神ノ昂揚ニアツテコノ大事実ヲ目前ニスル吾等又衷心コノ戦争ノ一端ニ勇躍参加シ蒙古自治邦ノ大精神タル東方道義ヲ振作シコレヲ基礎トスル邦民精神ノ昂揚ニ対シ教育者タル立場ニ於テ献身ノ努力ヲ誓フモノテアル〔馬紹箕 1943: 30〕

最後の馬忠も山西省大同出身で、小学校校長であった。さきほどの2人と同じく、日本語を流暢に使いこなす。日本軍占領後、早い時期に日本語を学んだのかもしれない。馬忠は訪日視察を可能にした日本の支援に感謝の意を示し、欧米諸列強や共産主義に立ち向かう日本こそが興亜・興蒙・興回を実現すると主張する。

大東亜聖戦ノ下私ハ政府派遣ニ団員タルノ光榮ヲ蒙リ日本視察ニ赴キタルガ此機会ニ於テ東亜ノ盟主大日本帝國ノ現在ノ実況ヲ認識シ以テ回教復興ヲ目的トスル諸般事業ノ資料トナスヘキ最大ヘ土産ヲ得タルコトハ実に政府ト共ニ盟主日本ノ援助提携ノ恩恵ニアリテマコトニ感激ニタヘズ視察セル處ハ即チ東京、京都、大阪、神戸、福岡、八幡、下関等ニシテ親シク窺ヒタルコロハ国民精神文化物質ノ豊富実力ノ充実政治ノ明朗治安ノ確定景緻ノ美感工商ノ発達産業ノ進歩交通ノ便利教育ノ普及並其他社会公共ノ各種事業整備ハ極メタルコト等ナリ特ニ日本国民ノ建国精神トソノ一挙一動ガ均シク国家ヲ中心トシ私心ヲ忘レ同心戦力相互団結シー億ノ国民総動員

ヲ以テ銃後ノ工作ニ努力シツツアル現況ハマコトニ感銘深く又国民性ニ至リテハ公儀ヲ好ミ国ノ為メニ自身ヲ忘レ忠君敬老ノ礼節ヲ崇尚シアルコト尚武ヲ学ブヲ好ムコト古風ヲ保チ（以下省略）〔馬忠 1943: 30〕。

又友邦国内ニアル回教ノ教育ハ友邦盟主ノ援助ニ依リ成績トミニ向上シアリ又回教宗義ノ提唱ニ関シテハ相当ニ進展シ東京神戸如キハスデニ壮嚴偉大ナル礼拜寺ヲ建築シアリ 又友邦人士ニハ近来回教学ヲ研究スル者多ク終始マコトニ愉快ノ旅情ヲ抱キ日本ニ於ケル教胞ヲ羨慕スルニ至リタリ 実ニ吾吾ノ帰国ヲ忘却セシムルモノアリタリ 誠ニ東亜新秩序ノ建設ノ領導者タルニ愧サル日本ノ偉容ガ今や全世界ノ上ニ燦燦ト耀キツツアリ我カ全蒙疆ノ回教教胞ニ謹シテ一言ヲ申上ケレハ現在ノ一切ノ緊張ノ下ニ自利ヲ中心トスル個人ノ生活向上ヲ図ルコトナク皇道ノ光沢ヲ蒙リ白色人種ノ蹂躪圧迫ヲシリゾケ速ニ旧来ノ思想ヲ純正ニシテ一致蹶起友邦盟主ノ援助ニ依リ共同ノ防共滅共米英ノ殲滅ニ心血ヲ注ギ一日モ早く興亜興蒙興回全功具現ヲ切ニ希望スルモノナリ〔馬忠 1943: 31〕。

馬忠の感想文で興味深い点は、大日本帝国の回教事情に関心を寄せていることであろう。もちろん彼の文章は社交辞令の表現に彩られているが、大日本帝国におけるモスクの建設、回教研究の隆盛に驚き、日本のムスリムに対して羨望の眼差しを投げかけている。

ここまで引用・紹介したのが第5回訪日視察団員たちの感想である。かれらの感想文は西北回教聯合会の機関誌に投稿されたという性格上、そこには大日本帝国や日本人に対する誹謗中傷や否定的評価は決して綴られておらず、かれらの感想文が本音をそのまま反映しているとは考えられない。しかしながら、そうであるからといって、かれらの意見や姿勢を一切読み取ることができないと判断するのは極論であろう。本稿では、そのような資料上の制約を自覚したうえで、『回教月刊（西北鐘声）』に掲載された感想文を貴重な一次資料として扱うことを断っておく。

Ⅳ 考察——植民地における異民族との遭遇

日本軍による内モンゴルの占領後、日本人は内モンゴル各地に移り住み、モンゴル人、漢人だけでなく、回民にはじめて遭遇した。当時、ムスリムは日本人にとってまったく馴染みのない他者であり、特に回民は非常に珍しい「少数民族」であったにちがいない。戦前・戦中期といえ、回教研究が日本国内で開花し、イスラームに関する調査・研究成果が数多く発表され、中国に移住した日本人に予備知識があったかもしれないが、回民に実際に出会ったことがある日本人は非常に少なかったはずである。それゆえ、本稿の前半では永や今西の回想録で指摘したように、日本人が内モンゴルで回民に遭遇した際、もの珍しい回民をエスニックな特徴が際立った「少数民族」とし

て接したり、語ったりしたことは想像に難くない。

当時の大局に目配りするならば、内モンゴルで回教工作に直接的・間接的に関与した日本人や回民が綴った文章を仔細に分析すると、「先進的」な日本人が「落伍」した回民を「教育」という図式がおのずと浮かび上がってくる。日本人側に回民を「大和民族」に同化させようという意図は直接的に表現されていないが、回民を大東亜共栄圏の一員として教化しようとしていた姿勢は言葉の端々にみられる。

それに対し、日本人から眼差しを向けられた回民は大日本帝国や日本人をどのように受けとめていたのであろうか。回民女塾の女子生徒の手記であれ、回教徒訪日視察団の感想文であれ、大日本帝国や日本人を直接見た回民の喜びとは大日本帝国が「興亜」・「興蒙」・「興回」の「希望の星」であると声高に主張し、日本人は「勤勉」・「親切」・「進歩的」な民族であると随所で力説し、大日本帝国を「大東亜」の「盟主」として過剰に高く評価していた。また、その際、回民の喜びとはイスラームのイデオロムを使用して大東亜戦争を「聖戦（ジハード）」と位置づけ（実際にジハードとして認識していたかどうかはともかく）、「聖戦」への参加を同じ回民に対して再三提唱していた。

それと同時に指摘すべきは、共産主義に対する嫌悪感からか、回民のなかには大日本帝国が提唱した防共の立場に共鳴した者が少なからず存在したことである。例えば、『回教月刊（西北鐘聲）』には、欧米諸列強だけでなく、中国国民党や中国共産党に対する敵愾心、また、その反動として、大日本帝国に対する期待が日本軍占領下の回民によって当たり前のように綴られている。もちろん被支配者の回民が日本人に向けて語ったわけであるから、かれらの発言内容に社交辞令が見え隠れていることには注意を払わねばならないが、日本軍占領下に暮らした回民（特に地元有力者）の立場や姿勢を垣間見ることができ、資料的価値が高い。

ただし、その資料的価値を見究める際、日本軍占領下の回民が完全なる弱者に貶められ、日本人の言いなりになっていたわけではないことにも注意せねばならない。駐蒙軍が満洲国から侵攻した後、日本人側の思惑や方針に便乗し、既得権益の保護や「回教復興」を画策した回民が少なからず存在した。西北回教聯合会の幹部を務め、回民女塾の是永俊子と交流のあった李郁周¹⁵⁾は、終戦直後、回民女塾を訪問し、回民女子教育に対する感謝の気持ちを是永に伝えている。

民族間の意志の疎通が戦争となり、今日に到ったが、我々の子供の時代には、互に手と手を取り合って仲良く往来出来る時代の来ることを信じている。回教徒の娘たちがほんとうにお世話になりました。感謝しています。先生方はお身体を大切に
して日本へお帰り下さい。自分の運命は覚悟していますから [是永 1981: 197]。

西北回教聯合会は日本軍特務機関によって設置された傀儡団体であったが、李郁周は張家口支部の責任者を務め、蒙疆回教徒訪日視察団に参加したことがあり、李郁周

が日本人と写った写真は容易にみつけることができる。おそらく李郁周は回民の有力者として日本軍特務機関に接触せざるをえず、そのような状況下にあっても回民社会の近代化に取り組もうとしていたのではないだろうか。

李郁周の事例にとどまらず、西北回教聯合会の幹部が日本軍特務機関員の要請を頑なに固辞した事例がある。厚和市の日本軍特務機関員太田が徳厚堂という運送会社の経営者（曹万）に対して訪日視察団への参加を執拗に要請したのだが、曹万は日本軍関係者との深い接触をできるかぎり回避し、自分の子どもを代理として訪日視察団に参加させ、その場を切り抜けた〔代林 2001：242-243〕。曹万の事例は、内モンゴルは日本軍占領下にあったが、回民の地元有力者にはある種の抵抗を示す余地が残されていたことを物語っている。

V おわりに

本稿では日本人側と回民側の見解を対比させるかたちで整理したが、それぞれの民族を十把一絡げに捉えることにも注意を要することは言うまでもない。善隣協会の関係者や訪問者の回想録を読むかぎり、内モンゴルの回民を皇民化政策によって「大和民族」のレベルにまで近づけるといった意味合いを読み取ることができるが、回民と接触した日本人のすべてがそのように捉えていたわけではない。日本軍占領下の内モンゴルで学術調査に従事した日本人研究者のなかには現地の情勢や住民の生活を冷静に観察していた者がいた。例えば、西北研究所に勤務した歴史学者の藤枝晃は回民女塾の様子を次のように語っている。

本部の近くに回民女塾というのがあります。イスラムの女学校、全寮制で。これは、是永〔章子〕という大分県のおバハンがやってたんや。この人は、その前に朝鮮で小学校の先生をしてたんや。その時分の日本政府の朝鮮政策ちゅうのは、朝鮮人をどこまで同化するかやったから、苗字やめさして、日本語を普及さしてという。それをそのままもってきて、日本語をメチャクチャに教えこんで。そやから、日本語は上手ですわ、ここの女生徒はね。何度もここの女生徒の日本語劇を見せられましたがね、一回は見られる。しかし同じもん二回見たら、もう見られまへん。かわいそうで、かわいそうで、猿芝居やらされてるみたいでね。もう少し教育の方法もあるやろうが、と思うんやけども、それを口に出すと、内政干渉になるんでな〔藤枝 1986：65〕。

藤枝は日本軍占領下内モンゴルの神社参拝に対しても鋭い批判の目を向けていた。ある日、藤枝が張家口の蒙疆神社¹⁶⁾を参拝したときの話である。

川の東の山の上に、蒙疆神社という大きいお宮さんがあって、僕ら毎月1日と15日、土橋中將に引っ張られてここにお参りに行くのやね。そうすと、回民女塾の卒業生が、見習事務員でいたが、それまで連れて行くのやね。そんなん具合悪い言うたら、女塾のオバハンにおこられて、そういう無理解な事から防ぐのが、あんたら研究員の役目やないか、ちゅうねん。日本の神さんにお参りして、おみきをいただく。一緒にイスラムの娘も。それで、あんたら、あれ、来ん方がええでと言うて、二、三回行っただけで、こっちが、陸軍中將が出張しておらん時に、総務部長あたりとかけ合せて、これはもう参加ささん方がええと言うて。それから、協会でコンパして、酒飲んで、イスラムの娘も来るのやね。酒の肴にハムを出すさかい、そんな物、目の前で出したらいかんと言うたら、これブタやない、ハムでっせちゅうねん。ハムならええでしょうと。それが本部の課長やからね、そんなん相手やから、もう、しんどい、しんどい〔藤枝 1986: 66〕。

西北研究所にかぎらず、日本の機関・団体に所属する者は、日本国籍であれ、中国国籍であれ、蒙疆神社参拝を義務付けられていた可能性が高い。善隣協会に回民女塾を卒業した女性事務員が在籍し、彼女までもが当たり前のように神道の蒙疆神社へ連れて行かれたわけである。東洋史を専門とする藤枝は内モンゴル回民の実態調査に参加したことがあり、一般の日本人より回民の宗教信仰や生活習慣を理解しており、周囲の日本人が異民族に対して配慮を示さなかったことに憤りを覚えたのであろう¹⁷⁾。善隣協会の日本人職員に対する藤枝の眼差しには鋭い批判精神が込められている。このような研究者による内モンゴル政策に対する批判は藤枝にかぎったことではなく、民族学者梅棹忠夫によってもはっきりと述べられている。例えば、梅棹は内モンゴルの牧畜政策を批判し、内モンゴル聯合自治政府内部で問題視されたことがあった〔梅棹 2011 (1991): 87-89〕。その出来事は「梅棹事件」と呼ばれていたが、内モンゴルでフィールドワークを実施した梅棹の研究者としての意識の高さを垣間見ることができる。

今西や梅棹の手記でときおり述懐されるように、戦前・戦中期、日本人の研究者たちが台湾、朝鮮半島、満洲国、北京、内モンゴルなどで実態調査を行ったことはよく知られているが、日本軍の植民地支配と中国国内の「少数民族」の関係性については2000年になってようやく正面から議論されるようになった。例えば、植民地人類学を提唱した文化人類学者中生勝美による研究〔中生(編) 2000; 中生 2016〕、モンゴル人の文化人類学者楊海英による興安軍官学校に関する研究〔楊海英 2015〕、京都大学人文科学研究所所蔵華北交通写真資料の整理〔貴司・白山(編) 2016〕などは世界的に注目されている。ひとつ付言するならば、従来の研究では歴史学者による文献史学のアプローチが主流であったが、2000年代以降、人類学者が現地でも聞き取り調査を実施しており、研究の裾野が広がりつつある。本稿で取り上げた回民女塾に関してい

えば、当時の卒業生が現在も健在だという情報を清真寺関係者から聴いている（2016年9月北京市におけるインタビュー調査）。その卒業生が快諾するかどうかかわからないが、今後、当時の様子を聞く機会があるかもしれない。

注

- 1) 本稿でいう日本軍占領下の内モンゴルとは、1937年から蒙疆聯盟自治政府（首府厚和）、察南自治政府（首府張家口）、晋北自治政府（首府大同）、1939年から蒙疆聯合自治政府（首府張家口）の管轄下にあった地域を指す。
- 2) 大日本帝国が戦前・戦中期にイスラムに対して展開した宣撫・懐柔工作に関しては、「回教政策」、「回教工作」、「回民工作」、「イスラーム政策」、「ムスリム宣撫工作」など様々な名称が使われているが、本稿では「回教工作」と表記することにした。
- 3) 1934年1月12日、善隣協会は財団法人として認可された。前身は1933年3月、笹目恒雄によって設立された日蒙協会である。日蒙協会の創設当初、笹目は日本陸軍の林銑十郎らの援助を受けており、善隣協会も日本軍関係者と深い関係にあった〔善隣会（編） 1981：ii〕。善隣協会の最初の理事長は陸軍少将の依田四郎であった〔野副 1981：37〕。善隣協会の目的は人道的立場に立ち、比隣諸民族の文化向上に資することとされ、1934年4月、モンゴル人を主な対象として小学校の開校、診療所の開設、牧場の経営が着手された。日本国内には専門学校が開校され、比隣諸邦の開発指導に任ずる日本青年の養成、内モンゴルからの留学生の教育に力が注がれた〔善隣会（編） 1981：ii〕。ちなみに、野副によれば、1935年8月の現地視察旅行をきっかけに善隣協会は中国西北の問題（つまりイスラム）にも関心を抱くようになった〔野副 1981：122〕。
- 4) 昭和15年には蒙古善隣協会の傘下に入った。
- 5) 第一期生の丁瑞蘭によれば、附属小学校では回民女塾の師範部に入学できない回民女性に対して教育（家事、手芸、筆記、裁縫など）を実施した〔丁瑞蘭 1941：6〕。
- 6) 本稿で取り上げるのは主に前者の師範部である。
- 7) 歴史の授業にはイスラーム史も含まれていた〔丁瑞蘭 1941：6〕。第一期生の丁瑞蘭が述べるには、回民女塾に入塾後、イスラームの素晴らしさを自覚したという。「鄙人自入塾後、才認識了吾伊斯蘭之偉大、吾回教精神之可欽、從歴史中始知道了吾回教昔日之光榮歴史、只因守旧之故、文化教育皆落於各民族之後」〔丁瑞蘭 1941：7〕。
- 8) 丁瑞蘭によれば、第一期生の募集人数は5名だったが、入学したのは4名だった。卒業後は日本軍占領下の内モンゴル各地で回民小学校の教員として採用された〔丁瑞蘭 1941：5〕。
- 9) 戦後日本の民族学の礎を築いた梅棹忠夫は張家口の西北研究所に勤務し、回民女塾を訪問したことがあるらしく、日本語能力の高さを指摘している〔梅棹 2011（1991）：28〕。
- 10) 例えば、坂本（編）〔2008〕、新保〔2002〕を参照されたい。
- 11) 詳細については陸軍省の機密史料に明記されている〔陸軍省 1938, 1939〕。
- 12) 男性だけでなく、蒙疆回教女子訪日視察団も派遣されている。
- 13) 第1回・第2回視察団の詳細についてはすでに言及したことがあるので本稿では割愛する。
- 14) 第5回視察団ではないが、東京で開催された回教園博覧会に参加した視察団もあった。
- 15) 李郁周は張家口出身の回民で、西北回教聯合会張家口支部長を務め、日本を訪問したことがある名士であった。是永が1945年9月に聞いた話によれば、李郁周は「民衆裁判にかけられて銃殺刑に処せられた」〔是永 1981：197〕。
- 16) 梅棹忠夫も張家口の蒙疆神社について言及している〔梅棹 2011（1991）：27〕。
- 17) 藤枝晃の語学力の高さについては梅棹忠夫が指摘している〔梅棹 2011（1991）：31〕。

参考文献

安藤 潤一郎

2014 「日本占領下の華北における中国回教総聯合会の設立と回民社会——日中戦争期中国の「民族問題」に関する事例研究へ向けて」『アジア・アフリカ言語文化研究』87: 21-81。

今西 錦司

1995(1948) 『遊牧論そのほか』(平凡社ライブラリー)、平凡社。

岩崎 民男

1981 「回民女塾の感銘」『善隣協会史』善隣会(編)、p. 153、日本モンゴル協会。

梅棹 忠夫

2011(1991) 『回想のモンゴル』(中公文庫)、中央公論新社。

貴司俊彦・白山真理(編)

2016 『京都大学人文科学研究所蔵 華北交通写真資料集成』国書刊行会。

貴司 山治

1981 「回民女塾の姉妹」『善隣協会史』善隣会(編)、pp. 226-227、日本モンゴル協会。

是永 俊子

1981 「善隣回民女塾の思い出」『善隣協会史』、善隣会(編)、pp. 194-198、日本モンゴル協会。

坂上 勉(編)

2008 『日中戦争とイスラーム——満蒙・アジア地域における統治・懐柔政策』慶應義塾大学出版会。

澤井 充生

2014 「日本の回教工作と清真寺の管理統制——蒙疆政権下の回民社会の事例から」『人文学報』483: 69-107。

2016 「西北回教聯合会の活動と回民社会の権力構造——『回教月刊(西北鐘声)』を手掛かりとして」『人文学報』512-2: 59-99。

新保 敦子

1999 「蒙疆政権におけるイスラム教徒工作と教育——善隣回民女塾を中心として」『中国研究月報』53(5): 1-13。

2002 『中華民国時期(1912-1949年)における国家統合と社会教育の研究』早稲田大学大学院教育学研究科博士学位請求論文。

善隣会(編)

1981 『善隣協会史——内蒙古における文化活動』日本モンゴル協会。

竹内 好

1942 「北支・蒙疆の回教」『回教圏』6(8・9): 36-57。

大日本回教協会

1940 『記録回教圏展覧会』大日本回教協会。

中生 勝美

2016 『近代日本の人類学史——帝国と植民地の記憶』風響社。

中生 勝美(編)

2000 『植民地人類学の展望』風響社。

長野 誠一郎

1981 「シリングル蒙古人と回教徒の診察」『善隣協会史』善隣会(編)、pp. 58-60、日本モンゴル協会。

野副 金次郎

1981 「善隣協会の対回教文化事業」『善隣協会史』善隣会(編)、pp. 121-125、日本モンゴル協会。

藤枝 晃

1986 「西北研究所の思い出——藤枝晃先生談話記録」、原山煌・森田憲司(編注)、『奈良史学』4: 56-93。

松本 ますみ

2015 「モンゴル人と「回民」像を写真で記録するということ——「華北交通写真」からみる日本占領地の「近

代』『アジア研究』別冊3：27-54。

蒙古自治邦政府回教委員会（編）

1942 『邦内回教調査概要』蒙古自治邦政府回教委員会。

楊 海英

2015 『日本陸軍とモンゴル——興安軍官学校の知られざる戦い』（中公新書）、中央公論新社。

白 體乾

1943 「訪日視察感想」『回教月刊（西北鐘声）』第3巻第1号：28-29。

代 林

2001 「『德厚堂』曹氏家史」『呼和浩特回族史料 第4輯』政治協商會議呼和浩特市回民區委員會・『呼和浩特回族史料』編輯委員會（編）、pp. 213-251、内蒙古人民出版社。

丁 瑞蘭

1941 「我在善隣回民女塾之觀感」『回教月刊（西北鐘声）』第1巻第3号：5-8。

1942 「伊斯蘭婦女應有之認識」『回教月刊（西北鐘声）』第2巻第1号：30-32。

孔 廣華

1943a 「聖戰下日本之雄姿」『回教月刊（西北鐘声）』第3巻第1号：21-22。

1943b 「訪日歸來後之感想」『回教月刊（西北鐘声）』第3巻第1号：27-28。

馬 紹箕

1943 「訪日視察感想」『回教月刊（西北鐘声）』第3巻第1号：29-30。

馬 忠

1943 「訪日視察感想」『回教月刊（西北鐘声）』第3巻第1号：30-31。

王 應選

1943 「友邦人情精神之我見」『回教月刊（西北鐘声）』第3巻第1号：20-21。

新聞

『蒙疆新報』（蒙疆新聞社）

1941 「訪日視察団座談会（8）」7月9日。

1941 「訪日視察団座談会（9）」7月10日。

雑誌

『回教月刊（西北鐘声）』（西北回教聯合会）

1941 『回教月刊（西北鐘声）』第1巻第3期、西北回教聯合会。

1941（1942？）『回教月刊（西北鐘声）』第1巻第4期、西北回教聯合会。

1942 『回教月刊（西北鐘声）』第2巻第1期、西北回教聯合会。

1942 『回教月刊（西北鐘声）』第2巻第2期、西北回教聯合会。

1942 『回教月刊（西北鐘声）』第2巻第5期、西北回教聯合会。

1943 『回教月刊（西北鐘声）』第3巻第1期、西北回教聯合会。

1943 『回教月刊（西北鐘声）』第3巻第3期、西北回教聯合会。

データベース（アジア歴史資料センター）

陸軍省 1938年10月1日 「蒙古聯盟自治政府主催回教徒訪日視察団の見学の件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C04120561300、昭和13年「陸支密大日記55号」（防衛省防衛研究所）。

陸軍省 1939年4月16日 「駐蒙軍参謀長 第2回回教徒訪日視察団派遣の件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C07091124800、「陸支受大日記（普）第5号 1／2 昭和14年5.4～5.31」（防衛省防衛研究所）。